

O-58 肺原発の腺癌と扁平上皮癌における Neuronatin の発現とその臨床病理学的意義内原 照仁^{1,2}・大窪 千草³・南 優子³・田中 良太⁴
飯島 達生²・藤田 次郎¹・野口 雅之²¹琉球大学 大学院 医学研究科 感染病態制御学講座 分子病態感染症学分野；²筑波大学 大学院 人間総合科学研究科 基礎医学系 病理学；³Dana Farber Cancer Institute；⁴群馬県立がんセンター 呼吸器外科

【目的・背景】我々は小細胞癌と神経内分泌大細胞癌との間の網羅的発現遺伝子解析で小細胞癌よりも神経内分泌大細胞癌に高発現している遺伝子の一つとして、Neuronatin を明らかにした。Neuronatin は新生児期または胎生期に特異的に神経系に発現され、正常成人では下垂体前葉のみに発現が認められる。今回、肺の非小細胞癌における Neuronatin 発現の意義を検討した。【方法】外科的に切除された肺非小細胞癌 92 例（腺癌 51 例，扁平上皮癌 41 例）のホルマリン固定パラフィン包埋組織を用いて免疫染色を行い、Neuronatin 蛋白の発現と症例の背景因子や組織学的特徴との関係を調べた。【結果】Neuronatin 発現陽性例は腺癌の 31.7%，扁平上皮癌の 63.4% にみられ、有意に扁平上皮癌に多かった。腺癌においては有意に分化度の低い癌に多く、扁平上皮癌においても同様の傾向を認めた。腺癌において、Neuronatin 陽性症例群の術後生存率は陰性症例群に比較し有意に不良であった。【結論】Neuronatin は肺非小細胞癌においても発現が見られ、特に低分化な癌に発現が多く見られた。腺癌については Neuronatin の発現は予後と関係しており、その発現は腺癌の多段階増悪に関与している可能性が考えられた。